



変化のすすめ

エプロン通信員 木村 美乃

わが家には車が二台あります。夫婦がそれぞれ一台ずつ車を所有し、日常生活の主な交通手段としています。

さて、つい先月のことです。老朽化した夫の車を買換えることにし、次の車が届くまでの約一週間を車一台で過ごすことになりました。初めは、車一台を共有することが、何となく楽しく新鮮に感じられました。家族の送迎を引き受けたり、歩いて外出したり……。

ところが、ほんの二三日でこの車共有生活に暗雲がたちこめはじめました。

八月の猛暑の中、普段は車で通過する道を歩くのは思った以上に大変でした。まず、暑い！そして同行者(三歳の息子)が、道端の草花や虫に目を輝かせ、目的地どころか、最寄りのバス停にさえ中々たどり着けません。彼にとつては移動そのものが「楽しいお散歩」でした。結局、しびれを切らした私がタクシーを止めるといったことになりましたが、後で「散歩を楽しむむゆとりのなかつた自分」を反省するのでした。何だかすっきりしない思いが残りました。この数日間の出来事で、車のない生

活に不便さを感じている自分自身に気づき、意外な思いがしたのです。

子どもの頃からバスに親しみ、「バス通学バス通勤の達人」を自負(?)していた私、また歩くことが好きだったはずの私が、今では車に頼りきって暮らしていることに気づいたのでした。

車を所有することで変化してきた私の生活。手に入れた便利さ快適さは有難く享受することでしょう。でも失いたくないものもある。例えばバスを待つ間、ほんやり考え事をする時間。歩いているときに感じる周りの景色。

ここでは、車に乗ることを良し悪しで分けることはできません。でも時々車置いて出かけてみてはいかがでしょうか。そんなちよとした生活の変化で、心に風が通って行くような気がします。



茶ぐわーゆんだく

42

中頭農学校の運動会

一九〇七(明治四十)年に現在の普天間高校敷地に開校した中頭郡間切組合立甲種農学校(中頭農学校)は、農業に関する講話会や、養豚の品評会を開き、地域と結びついた農学校として親しまれてきました。農学校への入学受験者には、ハワイへ出稼ぎを希望する者もいました。

そんな中、十月には宇宜野湾にあった宜野湾馬場にて運動会が行われました。一九〇八(明治四十一年)年の運動会では、生徒達による水車競争が観客の喝采を受け、蓑を着けての蓑装競争では実際の農作業の姿を描いていると称賛されました。また、一九一一(明治四十四)年の運動会では、「同身長徒歩競争」という種目もあり、一等にはメダルも授与されました。現在の運動会とは、一味違う競技が行われていたのですね。しかし、この中頭農学校は、一九一六(大正五)年に国頭、島尻の各農学

校と統合され、嘉手納に移転しました。今では中頭農学校だけでなく、運動会の会場だった宜野湾馬場も普天間基地の一部となつて面影もありませんが、秋風のそよぐこの時期の運動会は、今でも競技者の迫力に観る者を興奮させ、楽しませてくれます。



中頭農学校(普天間)の教員と生徒(年代不詳)

☆「宜野湾市史」への問合せ
教育委員会文化課
☎八九三ー四四三三